20　次の文章は、林京子の小説「トリニティからトリニティへ」の一部である。一九九九年秋、「私」は世界ではじめて原子爆弾の爆発実験が行われたアメリカ合衆国ニューメキシコ州の「トリニティ・サイト」と呼ばれる地を訪れる。以下はその時のことを述べたものである。これを読んで後の問いに答えよ。

〈大阪大〉二〇二一年度出題

　フェンスの内の広さは、野球場が六つも七つも入る、原っぱだった。囲いの外の地域も含めて、辺りはミサイル実験場なのだろう。観光写真に載っているホワイトサンドと、ミサイル実験場になっているホワイトサンドが、同じ地点とは思わないが、〝今日までに四万二千発のミサイルが発射されている〟という。〝射撃場のどこかに射撃物が埋まっている可能性があるので、よく注意すること、またこれは常識である〟と注意書きがあった。『トリニティ・サイト一九四五―一九九五年』という小冊子には〝フェンス内の放射能レベルは低く、一時間のツアーで〇・五から一ミリレントゲンを浴びる計算になる。アメリカ人の大人は毎年一年間に、平均九十ミリレントゲンの放射線を浴びている。例えばエネルギー省の発表によると三十五～五十ミリレントゲンを太陽から、三十～三十五を食物からとっている。見学を決めるのはあなたである〟と危険性は十分に説明されていた。

　フェンスのなかに一時間とどまると、〇・五ミリから一ミリレントゲンの放射線が、人体に加算されるのである。アメリカ人の大人が、年間に浴びる放射線が九十ミリレントゲンとあるから、「トリニティ・サイト」で浴びる放射線は、決して低いとはいえない。

　私たちは車から降りると、許可されたミネラルウォーターのボトルをもって、フェンスの内へ歩いていった。見学者は二百人ばかりである。家族連れが多く、子供の手を引いた父親の姿が目につく。砂漠の植物のトゲと、放射能をもつ短かいの草に気をとられているからだろうか。見学者たちはうつ向いて、無言で歩いていく。荒野のなかで動いているのは、「トリニティ・サイト」を歩く人間だけである。樹木がない荒野では、小鳥も巣が造れないのだろう。

　私は、鳴りを静めた荒野に耳を澄ました。陽にあたためられてはぜる草の実の、小さいが力強い音が聞きたかった。地獄を滑り落ちていく虫がたてる、あがきの砂の音でもよかった。⑴生きているものがたてる物音を、私は聞きたかったのである。

　私は「グランド・ゼロ」へ向かって歩いていった。石の碑を取り巻く見学者の、輪の外まで歩いて、私は立ち止まった。顔をあげて四方をみた。一望千里、身の隠し処のないである。地面より高いのは人間と、「トリニティ・サイト」を囲むフェンス、遠くの地平線に連なる赤い山肌。その中心点、私の目の前に立つ「グランド・ゼロ」の記念碑だけである。

　五十余年前の七月、原子爆弾のはこの一点から、曠野の四方へ走ったのである。実験の日は朝から、ニューメキシコには珍しい大雨が降っていたという。実験は豪雨のなかをついて、行われた。閃光は降りしきる雨を煮えたぎらせ、白く泡立ちながら荒野を走り、無防備に立つ山肌を焼き、空に舞い上ったのである。その後の静寂。攻撃の姿勢をとる間もなく沈黙を強いられた、荒野のものたち。

　大地の底から、赤い山肌をさらした遠い山脈から、褐色の荒野から、⑵ひたひたと無音の波が寄せてきて、私は身を縮めた。どんなにか熱かっただろう―。

　「トリニティ・サイト」に立つこの時まで、私は、地上で最初に核の被害を受けたのは、私たち人間だと思っていた。そうではなかった。被爆者の先輩が、ここにいた。泣くことも叫ぶこともできないで、ここにいた。

　私の目に涙があふれた。

　係官の誘導に従ってフェンスのなかの細い道を歩き出したときから、あれほど自覚的だった被爆者意識が、私の脳裏から消えていた。「グランド・ゼロ」に向かう私は、被爆する以前の、十四歳の少女に還っていたようだった。八月九日を体験する前の「時」に戻って、「グランド・ゼロ」という未知なる地点へ、歩き出していたのかもしれない。記念碑の前に立ったときに私は、正真正銘の被爆をした。

　思い返してみると、八月九日に私は一滴の涙も流していない。手や足や、顔の形をとどめない人の群に混って逃げながら、涙は流さなかった。真夏の道の蟻のように、浦上の焼け野原に一筋の列ができていた。治療を受けるために集まった、まだ歩ける人の列だった。列と向きあって、一人の医師が手当をしていた。割れた敷石に腰かけた医師も、頭に包帯を巻いていた。ガレキになった長崎の街は海まで見渡せて、地面より高いものは、ここにも人間しかいなかった。私は、光のなかに浮き出た光景をみながら、ひたすら逃げた。

　三日後に、疎開地から七里の道を歩いて母が私を探しにきた。途中で、浦上の救援に向かう学生たちに母は私の職場を告げて、細い骨があったら娘のですから拾ってきてください、と頼んだ。

　私が無事であるのを知ると、生きてたのね、といって母は胸に抱きしめて泣いた。それでも私は涙を流さなかった。⑶八月九日に流さなかった涙を、私は人としてはじめて流したのかもしれない。もの言わぬ大地に立ったとき私は、大地の痛みに震えた。今日まで生きてきた日日も、身心に刺さる非情な痛みだった。しかしそれは、九日から派生した表皮の痛みだったのかもしれない。私は、自分が被爆者であることを忘れていたが、沈黙を続ける大地のなかに、年月をかけて心の奥に沈めてきた逃げた日の光景を、みていたのだろう。決定的な日の私を。

　「グランド・ゼロ」へ歩いていく一人の老人の後姿が、私の目に映った。集団から離れて、老人はをついて歩いている。七十二、三歳だろうか。上背のある、骨組みがしっかりした体格である。退役した軍人のように思える。目が悪い様子で、黒いレンズの眼鏡をかけている。連れ添っている者はいない。体の自由が利くうちに「グランド・ゼロ」を訪ねたい、とバスツアーに参加したのだろう。憂いがある老人の姿に、私は惹かれた。どんな半生を生きてきたのか。わざわざ「トリニティ・サイト」まで訪ねてくるぐらいだから、ミュージアムの老人や子の夫のように、第二次世界大戦を戦った男なのだろう。

　杖の先で「トリニティ・サイト」を探りながら歩いていた老人が、石碑を取り巻く人垣の外で、足を止めた。杖の頭に両手を重ねておいて、遠くから石碑を眺めている。

　迷彩服を着た三、四人の少年が、老人の横を駆け抜けていく。赤いフリスビーを空に投げ上げて、一人遊びをしている少年もいる。

　前日まで空軍基地内の、アトミック・ミュージアムにあったァットマンが、夜を徹して運ばれて、フェンスの内に展示してあった。爆発実験に使われたプルトニウム爆弾と同型の、兄弟分である。年に二回の里帰りなのだ。

　月子と私は、いつか手をつないで歩いていた。日本の野山でみかける、ぼけの花によく似た五弁の花が、草のなかに二つ三つ咲いている。黄色い、艶のある花も咲いている。月子と私はしゃがんで、地にみついて咲く花を眺めた。ナ生きているかしら、と月子がぽっ、といった。だいじょうぶよ、と私はいった。

　月子と私は、爆発実験でできたクレーターをのぞいてから、出口に向かった。出口、すなわち入口でもある辺りに、人だかりがしている。入るときには気が付かなかったが、木のテーブルが出されて、テーブルの上に、爆発実験のときに使われた計器類の破片と、目覚し時計、部品の鉄片が並べてある。女性係官が目覚し時計に、イガー計数管を当てた。針が大きくぶれて、計数管が鳴り出した。

　雨の日の、実験に使われた計器類である。まだ放射能が残留している、といって、針をさして説明する。音が強くなり、弱くなって波を打つ。アメリカ人たちは首をふって、おお、と半世紀むかしの威力に感動し、月子も私も、いね、と首をふった。

　係官は、どうだ、という表情である。⑷私は感動して見入っている自分や、テーブルを囲む人びとが滑稽になり、自分の体に、ガイガー計数管を当ててみせたくなった。ガアガア鳴り出したら、みんな驚くだろうな、と。

　地上に放射された放射能の残留年月は、物質にもよるが、半永久的といわれている。フランスに住む知人の話によると、キュリー夫人の研究室に入ると、いまでも計数管が鳴り出すそうである。

（林京子「トリニティからトリニティへ」による）

＊月子―カナの幼なじみでテキサス州在住。カナの紹介で「私」と知り合う。戦争中は疎開していたので被爆はしていない。

＊ファットマン―一九四五年八月九日、長崎に投下されたものと同型の原子爆弾。

＊カナ―「女学校時代」の「私」の同学年生。「私」とカナは二人とも勤労動員中に被爆している。近年は消息が途絶えている。

＊ガイガー計数管―放射線量を測定する機器。

問１　傍線部⑴について、「私」が「生きているものがたてる物音」を「聞きたかった」のはなぜだと思われるか、説明せよ。

問２　傍線部⑵において、「無音の波」という表現にはどのような効果があるのか説明せよ。

◎問３　傍線部⑶について、なぜ「私」は「八月九日に流さなかった涙」を「人としてはじめて流したのかもしれない」と思ったのか、その理由を説明せよ。

問４　傍線部⑷について、なぜ「私」は「感動して見入っている自分や、テーブルを囲む人びとが滑稽にな」ったのか、その理由を説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ世界ではじめて原子爆弾の実験が行われた土地を訪れた私は、Ｂ放射能の影響が色濃く残り全く生の気配が感じられない異様な光景に、Ｃ命の安全がゆらぐ緊張感を覚え、この荒野に生きるＤ草や昆虫のたてる音を聞き取り、命の気配を感じ取りたかったから。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「トリニティ・サイト」がどんな場所なのかを説明。〕

Ｂ＝２〔現在もこの場所に放射能が残存し危険であるという説明。〕

Ｃ＝２〔この場所に立つ私の心情の説明。「恐怖」なども可。〕

Ｄ＝４〔「命の気配」や「生きる実感」を希求する私の心情を説明。〕

問２　原子爆弾のＡ閃光と熱は「トリニティ・サイト」に存在したすべての生物を一瞬で焼き払い、生きて動くものの音のない世界を作り上げたが、Ｂその時に泣くことも叫ぶこともできなかった大地や自然に思いをはせ、Ｃ今も静寂の中に彼らの悲鳴や無念が続いていることをＤ読者に伝える効果。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔五十余年前の原爆実験の様子を本文に即して説明。〕

Ｂ＝３〔「大地」「山脈」「荒野」への筆者の擬人的な捉え方を説明。〕

Ｃ＝３〔「身を縮め」から、私が今、何におびえているかを推察。〕

Ｄ＝２〔表現の効果について問う設問に合わせてまとめる。〕

問３　Ａ八月九日の光景やその後に続く身心の痛みは、あまりに衝撃的すぎてＢ私には受け止めきれず、心の均衡を保つために奥底に封印してきたが、「トリニティ・サイト」に立ち、Ｃ最初の被爆者ともいえる物言わぬ大地の痛みを感じることによって、Ｄ封印してきた感情を解放することができたから。

ＡＢとＣＤの対比がなければ全体０。

Ａ＝３〔被爆の日とその後の私の体験を本文に即して説明。〕

Ｂ＝２〔生きるために被爆の痛みへの直視を避けてきた心情を説明。〕

Ｃ＝３〔「大地の痛み」を感知して私の心が動いたことを説明。〕

Ｄ＝２〔私が被爆の痛みを新たにどう受け止め直したかを説明。〕

問４　原子爆弾が焼き尽くした荒野を見たにも関わらず、Ａ半世紀も前の放射能が残留し半永久的に影響し続ける事実を考えず、Ｂそれがもたらす悲劇や苦難を忘れ、Ｃ被爆者の自分も加害側のアメリカ人も、この場の人間がそれぞれに驚嘆する姿は、Ｄあまりに無邪気で愚かなものだと感じたから。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔放射能の実態について本文の内容を踏まえて説明。〕

Ｂ＝２〔放射能の威力を時間とともに忘れ去る人間の習性を説明。〕

Ｃ＝２〔自分も周囲の人もどちらもが「滑稽」だとする点に注意。〕

Ｄ＝４〔人間を批判する内容。「あきれ果てる」などの表現でも可。〕